

魚の玉 鹿兒島県

むかし、あるところに、八っさんという男の人がいました。心根のいい人でしたが、とにかく貧乏で、毎日毎晩なわのないをして、なわを売って、おかみさんと子どもを養っていました。

ある日のこと、八っさんは、いつものように、なわを売って歩いていました。すると、ふたりの若者が、近づいてきていいました。

「とつつあん、とつつあん。そのなわ、いくらで売るんだ」

八っさんは、

「十本一たばで三銭だ」と答えました。若者たちは、

「それで、毎日どのくらい売れるんだい」とききました。

「天気の良い日は七たば売って二十一銭もうけるが、雨の日は五たばか三たばしか売れん」

「それは気の毒だなあ。ここに百円あるから、とつつあんにやるよ。このお金で楽に暮らしな」

若者のひとりがそういって、八っさんに百円くれました。八っさんは、おどろいて、

「いったい、あんたがたは、どこの人だ」とききました。若者は、

「どこの者でもいいじゃないか。おれはセージといって、このセードとふたりで旅をしている。また回ってくるよ。お金を持って帰りな」といいました。八っさんは、深くお礼をいって、お金をもらって帰りました。

帰るとちゆう、八っさんは、考えました。

「おれは、今まで精のつく物を食べたことがないなあ。今日は、牛の肉を十銭分だけ買って帰ろう。そして、白い布を十銭分買って村で二十銭で売れば、百円は手を付けないですむ」

八っさんは、牛の肉と白い布を買いました。それをかつぐと、百円のお金を入れる所がありません。そこで、百円は帽子の裏に入れて、かぶりしました。

歩いていると、とんびが飛んできて、牛の肉をさらっていきうとしました。八っさんが、手で追いはらうと、とんびは、帽子をくわえて飛び去りました。

「待てえ！その帽子は置いていってくれ。牛の肉はやるから」

いくらさけんでもむだでした。とんぴはどこかへ飛んで行ってしまいました。

八っさんは、家に帰ると、おかみさんに、

「言っても悲かなしくなるだけなんだがなあ。まあ、聞いてくれ。今日、セージとセードというふたりの若者に会ってな。そのセージが、楽に暮らせと行って、百円くれたんだ。それを帽子に入れてかぶって歩いてたら、とんぴが飛んできて、帽子ごとさらわれてしまった」と、話しました。そして、牛の肉は子どもたちに食べさせて、自分は、またせつせとはたらきました。

一年たったお盆ぼんの日、八っさんは、なわを売り歩いていて、また、セージとセードのふたりに会いました。セージが、

「どうした、とつあん。あれほどのお金をやったのに、どう使い果はたしたんだ。もとの帽子さえかぶれずに、そんな破やぶれ帽子をかぶるような貧乏やぶになって」といいました。八っさんは、

「そういわれるのは、もっともだ。じつは、あの百円は、帽子といっしょにとんぴにとられてしまったんだ」といいました。セージは、

「あれまあ。そうか」といって、セードにいいました。

「おれにはどうしても、この難儀なんぎな人を助たすけることはできないようだ。こんどは、セード、おまえが何とかしてくれ」

セードは、さいふから、小指こゆびくらいの大きさの鉛なまりを取り出して、八っさんにわたしました。八っさんは、お礼をいったものの、心の中では、こんな物もらってもどうしたらいいんだと思いました。それでも、鉛をたばこ入れの中にしまつて、家に帰りました。

その日、八っさんの家のとなりの漁師りょうしが、投げあみを打ちに出かけようとして、あみのおもりがとれているのに気がつきました。それで、おもりにする鉛はないかと、村じゆうをたずねて歩きましたが、だれも持っていないませんでした。最後さいごに八っさんの家に来て、

「八っさん、鉛があつたらゆずつてくれないか」といいました。八っさんは、

「ちようどここに、さつきもらつた鉛があるから、これをやるよ」といいました。

「ただでもらつてはすまないから、売ってくれ」

「いや、心配しんぱんはいらないから、持つて行け」

となりの漁師は、よろこんで鉛を持つて帰りました。すると、漁師のおかみさんが、八

っさんの家にやって来て、

「うちの人が、鉛をもらったそうだけど、おかげで、投げあみを打ちに出ることができ
る。お礼に、最初のひとあみでとれた魚をもらっておくれ」といいました。

その晩、となりの漁師が、最初のひとあみでとれた大きな魚を、八っさんの家を持っ
て来ました。

「これは、うちのかみさんが約束したものだ」

「こりやありがたい」

八っさんは、よろこんで魚をもらいました。

八っさんが、もらった魚を料理していると、魚のお腹の中から、六角形のビードロ玉
が出て来ました。八っさんは、それを子どものおもちやにあたえました。

その夜なか、子どもがあんまりひどく泣いて、泣き止まないの、起こしてみると、
子どもはビードロ玉を握りしめていました。ビードロ玉は、たいそう美しく輝いていま
した。八っさんは、

「これは、よい物がさずかった」といってよろこびました。

朝になると、向かいの家の玉造りのおかみさんがやって来て、

「子どもを泣かさないでおくれ。夜なかにあんなに泣かれると、おまえたちは仕事がな
いから、寝なくてもいいだろうけれど、わたしらは、いそがしくてつかれているんだか
ら」といいました。八っさんは、

「そりやもつともだ。じつは、子どもがビードロ玉を握りしめて寝ていたせいなんだ」
と、わけを話しました。

「へえ、その玉、ちよつと見せておくれ」というので、見せると、玉造りのおかみさん
は、

「これ売っておくれ」といいます。八っさんは、ちよつと考えて、

「ねだんによつては売らないこともない」と答えました。

「じゃあ、家に帰って相談してくるよ」

玉造りのおかみさんは、そういつて帰りました。

しばらくして、玉造りの跡取り息子がやって来て、

「あの玉を三百円で売ってくれないか」といいました。八っさんは、

「おれは、この玉の値打ちを知っている。三百円では売れない」といいました。

「では、五百円で売ってくれ」

「五百円でも売れない」

八っさんのおかみさんは、気が気でありません。いくらでもいいから早く売ってしまいなさいと、後ろから合図あいずします。けれども、八っさんは、首をたてにふりません。

「それなら、いくらなら売ってくれるか」と、玉造りの息子が聞きました。

「千円で売ろう」

玉造りの息子は、

「八百円なら持っている。八百円で売ってくれ」といいました。

「いいや。千円より安く売ることほできないな」

「じゃあ、しばらく待ってくれ。どこかで二百円借りてくるから」

やがて、玉造りの息子が千円のお金を持って来たので、八っさんは、玉を売りました。

八っさんは、その千円で、楽に暮らせるようになりました。

つぎの年のお盆に、また、セージとセードが村にやって来ました。ふたりは、うわさを聞いて、八っさんの所にたずねて来ました。セードが、

「とつつあん、今度はうまくいったね」というと、セージが、

「セードに助けられたね」といいました。八っさんは、ふたりにお礼をいって、

「これから親類しんるいを集めてお祝いいわいをしてご恩送りおんおくをしたいと思います」といいました。そして、ふたりを厚くあつもてなして、ご恩を送りました。

八っさんは、今でもよい暮らしをしているということです。

村上郁再話

資料『沖永良部島昔話集』関敬吾／岩崎美術社